

権利委員会だより：1

加茂嘉久 権利委員長

●プロローグ

専門学校の時間講師を頼まれて、足かけ七年目になる。デザイン専攻学生の卒業制作担当だが、若い学生の熱気とエネルギーをうけて、ぼく自身がフレッシュできる勉強の場だ。

ところが三年目位に、気がかりなことが起きた。気宇壮大、奇想天外な作品にまじって、生まじめな小品が、それもこまかい手仕事を提出する学生がすくなくからずいる。むしろ彼等を、相棒の広瀬さんと応援してきたのだが、その作者達が、必ずしもその才能を生かせるような就職をしないことだった。

はっきりいえば、びっしりとロゴを描いて美しい本を作ったS君、夢のような本をつくったKさん達は、ブック・デザインの仕事には進んでくれないのだった。研究科に残るのはいい。しかし、ぼくらにインパクトを与えるような新人として、立ち現れようとはしないのだ。

広瀬さんと盃を傾けながら話した。

「そりゃそうだよな。ぼくらだって、特別の仕事でなきゃ、十五年前と同じ稿料だもんな。彼等は若いから、もっと値切られるに決まってる。それで恋もしろ、結婚もしろったって酷だよ。」

というのが結論だった。どんな有能な若者も、現状じゃアドバイジングや、パッケージへ就職したくなるだろう。それでは、ぼくらの世界がやせ細っていく。彼等は、ブック・デザインなんかやったら、バラ色の未来は愚か、生涯計画がたてられないことを知ってます、といいたいのかもしれない。それでいて、「一生に一度、ぼくにしか作れない本を作るのが夢です。」なんて泣かせてくれる。

「こりゃまずいよ。絶対まずい。」

何人かで金をかき集めて、賞金つきのコンペをやるか。それじゃ権威主義みたいで、いやだな。

それより、ぼくらの足元がしっかりしてないと見抜かれてんじゃないの。まだまだ仕事じゃ彼等に追い越されちゃいないぞ。それじゃ、ぼくらの仕事の地位の低さに呆れてんのかな。そうかもしれない。

それじゃ、ぼくらの立場をはっきりさせるための、仲間づくりの方が先じゃないか。

という具合で、出版美術にかかわる専門家の団体をつくらう、と集まり始めたのが五年ちょっと前の四月だった。

締切日に納品しても、稿料はいくらか、いつ支払われるのか、出版社ごとのしきたりが違って、銀行へ行って始めて自分の仕事の値段を知るといふ商習慣。

あんなにせっついた版下や画稿も、使ってしまったら工場や編集室の片隅、年に一度の大掃除まで日の目を見ないルーズさ。紛失してもゴメンナサイがないことも多い。

表紙をつくったつもりが、新聞広告や車内吊りにまで流用され、何の挨拶もないケース。

一点だけ描かせ、二点目からは若い人に「この通りにつくれ」と回してしまう裏切り。

不満そうにすれば、

「君、デザイナーに著作権はないんだぜ。判例がちゃんとそうなってる。君の仕事は、うちの編集部の下請けに過ぎんのだよ。」

……etc……何度押し切られてきたことか。ものによっては、十年前より実質値下げになる仕事だってある。

これをまともにしなきゃ、経済的要求どころか、社会的に余計なことをしているようなウシロメタサさえつきまとう。

ぼくらの仕事って、いったい何なんだ。じっくり考えてみよう。それはきっと、仕事の質の向上にも役立つはずだ。

知りあいをたどって呼びかけたが、それぞれ一国一城の主ばかり。まとまりかけては崩れ、決まりかけては潰れるなかで、準備会のメンバーに落着いたのが、おとしの六月だった。何からやるかは、会則を作りながら考えよう、と会則づくりが始まった。

どんな分科会(委員会)が必要だろう、と話し合ううち、福利、厚生と、受注契約合理化と、制作料金算定と、海外事情研究と、著作権の勉強会が、ひとつにまとめられて権利委員会ということになった。

法的権利の前に、まず生存権の委員会。健康診断や、集団保険や、スパイ防止法反対や、親睦会も守備範囲だ。そのうえに、協会をつくるキッカケになった不合理な慣習を是正していく役目がのっかっている。

会員がどう期待するにせよ、権利委員会が正しく機能して、初めて協会の存在理由が明らかになるんだ。ネーミングが、ちょっと大上段だが、ブック・デザイナーの社会的認知が成立するまで、この看板おろせないと思う。

すぐ目に見えるみのりとて、ないかもしれない。しかし、どんなに時間がかかっても、回り道しても、志だけは持ち続け、積み重ねる決心の、権利委員会参加の委員諸氏は、口数のすくない、目立たないタイプの人が多いというのも、ムベなかな、だ。